

博士論文（要約）

現代韓国語の「-n kes-ita」文に関する考察

－「主題-解説」構造の観点から－

李 英蘭

## 目 次

### 第1章 序論

- 1.1 研究の背景と目的
- 1.2 研究の対象
- 1.3 用例の抽出資料
- 1.4 論文の構成

### 第2章 先行研究とその問題点

- 2.1 kes-ita の概観
  - 2.1.1 中核要素：kes
  - 2.1.2 先行要素：連体修飾節
  - 2.1.3 後行要素：ita
- 2.2 kes-ita に関する先行研究の概観
  - 2.2.1 kes-ita の再構造化に関する先行研究
  - 2.2.2 kes-ita の意味・機能に関する先行研究
- 2.3 先行研究の問題点と本論文の立場

### 第3章 理論的枠組み及び研究方法

- 3.1 名詞性の度合いから見た kes-ita 文の分類
  - 3.1.1 kes の代用テスト
  - 3.1.2 「-(u)m」名詞化辞への置き換えテスト
  - 3.1.3 「-kes-i anita (～のではない)」否定テスト
  - 3.1.4 「-ita」抜きテスト
  - 3.1.5 分裂文の成立テスト
  - 3.1.6 まとめ：kes-ita 文の3分類
- 3.2 kes-ita 文の「主題－解説」構造
- 3.3 kes-ita の基本的機能（仮説）
- 3.4 研究の方法.....

### 第4章 名詞文としての kes-ita 文

- 4.1 概要
- 4.2 主題が構文明示的である場合
  - 4.2.1 kes が具体的なものを指し示す場合
  - 4.2.2 kes が抽象的なものを指し示す場合
  - 4.2.3 kes が名詞化辞として働く場合
  - 4.2.4 kes の指示対象の意味拡張
- 4.3 主題が構文非明示的である場合
- 4.4 名詞文としての kes-ita 文の意味解釈のプロセス
- 4.5 まとめ

### 第5章 疑似名詞文としての kes-ita 文

- 5.1 概要
- 5.2 疑似名詞文としての kes-ita 文の意味解釈のプロセス
- 5.3 言い換えを述べる kes-ita 文
- 5.4 結果を述べる kes-ita 文
- 5.5 理由を述べる kes-ita 文
  - 5.5.1 理由が話し手の領域に属する情報である場合
  - 5.5.2 理由が話し手の領域に属する情報でない場合
- 5.6 主観的解釈を述べる kes-ita 文
- 5.7 疑似名詞文としての kes-ita 文と非 kes-ita 文の違い
- 5.8 まとめ

### 第6章 非名詞文としての kes-ita 文

- 6.1 概要
- 6.2 非名詞文としての kes-ita 文の意味解釈のプロセス
- 6.3 後続発話への関連を提示する kes-ita 文
- 6.4 まとめ

### 第7章 二次的な意味が現れる kes-ita 文

- 7.1 当為判断を表す kes-ita 文
- 7.2 忠告・命令を表す kes-ita 文
- 7.3 まとめ

### 第8章 kes-ita 文の意味解釈のプロセス

- 8.1 kes-ita 文の意味解釈のプロセス
- 8.2 kes-ita の基本的機能（修正案）

### 第9章 kes-ita 文と日本語との比較.....

- 9.1 kes-ita と「モノダ」
- 9.2 kes-ita と「コトダ」
- 9.3 kes-ita と「ノダ」
- 9.4 非名詞文としての kes-ita 文とノダ文

### 第10章 結論

- 10.1 論文の要約
- 10.2 今後の課題と展望

### 参考文献

### 付録1. 用例数のまとめ

## 第1章 序論 / 第2章 先行研究とその問題点

本論文の目的は、現代韓国語の文末に現れる *-n kes-ita* (以下、*kes-ita* と表記) 文について、*kes-ita* 文の諸特徴を考察することにより、従来の研究では明確ではなかった *kes-ita* の基本的な働きを明らかにし、*kes-ita* 文の全体像を示すことである。

*kes-ita* 文は、形式名詞である *kes* に、指定詞の *ita* が後続したもので、本来は名詞文をなしている。しかし、*kes-ita* 文には、統語的に名詞文であると言えるもの (1) もあれば、名詞文であるとは言い難いもの (2) もある。

(1) 이 책은 타로가 읽은 것이다.<sup>1</sup>

i chayk-un thalo-ka ilkun kes-ita.  
この本は 太郎が 読んだ(過去) kes-ita

(この本は、太郎が読んだものだ。)

(2) 문을 여는 소리가 들렸다. 타로가 돌아온 것이다.

mun-ul yenun soli-ka tullyessta. thalo-ka tolaon kes-ita.  
ドアを 開ける 音が 聞こえた 太郎が 戻ってきた(過去) kes-ita

(ドアを開ける音がした。太郎が帰ってきたのだ。)

従来の研究では、(2) のように統語的に名詞文であるとは考え難い *kes-ita* 文の *kes-ita* の機能は、「前後の文を結びつけ、それについて説明をする「説明のモダリティ表現」である (李南姫 2001、印省熙 2006、幸松 2006 など)」と述べられている。しかし、*kes-ita* という同一形式が用いられるにも関わらず、「文を名詞文にする」という機能と、「説明のモダリティ表現」という機能は、全く別の形式であるかのように、両者の間の関連を上手に説明できないという問題がある。

本論文では、一見、統語的にも意味的にも異なるものと見えるが、(1) と (2) のような *kes-ita* 文の間には何らかの関連があると思ひ、(1) のような名詞文である *kes-ita* 文と、従来、説明のモダリティ表現とされてきた (2) のような *kes-ita* 文、両方を意味レベルにおける *kes-ita* の働きを網羅的に説明するためには、「主題－解説」構造という概念が有効であると考え、*kes-ita* 文を「主題－解説」構造の観点から考察し、*kes-ita* の基本的な働きを明らかにすることを試みる。

そのため、まず、集めた資料から *kes-ita* 文を抽出し、名詞性のテストを設け、統語構造の違いによって *kes-ita* 文を再分類する。そして、それを基に、*kes-ita* 文を「主題－解説」構造の観点から考察し、*kes-ita* 文の意味解釈のプロセスを示す。それにより、先行研究で

<sup>1</sup> 用例の番号は、論文での番号である。

は把握できなかった kes-ita の基本的な機能と kes-ita 文の全体像を網羅的に説明することができると思う。

### 第3章 理論的枠組み及び研究方法

3章では、kes-ita 文を統語的に再分類するために5つのテストを設け、kes-ita 文の名詞性の度合いを判断した。テストに用いられた用例は、次の(2)～(6)のとおりである。

(2) 이 책은 타로가 읽은 것이다.

i chayk-un thalo-ka ilkun kes-ita.

この本-は 太郎-が 読んだ(過去) kes-ita

(この本は、太郎が読んだものだ。)

(3) 주방을 오픈하는 건 노하우를 다 보여주는 거야.

cwupang-ul ophunhanun ke-n nohawu-lul ta poyecwunun ke-ya.

厨房-を オープンする こと-は ノウハウ-を 全部 見せてあげる(現在) kes-ita

(厨房をオープンにすることは、ノウハウを全て見せることだ。)

【コーヒー】

(4) [ソウルへいつ行くのかを聞かれて]

13 일에 가. 예정보다 2일 일찍 가는 거야.

sipsamil-ey ka. yeyceng-pota iil ilccik kanun ke-ya.

13日-に 行く 予定-より 2日 早く 行く(現在) kes-ita

(13日に行く。予定より2日早く行くんだ。)

(5) 문을 여는 소리가 들렸다. 타로가 돌아온 것이다.

mun-ul yenun soli-ka tullyessta. thalo-ka tolaon kes-ita.

ドア-を 開ける 音-が 聞こえた 太郎-が 戻ってきた(過去) kes-ita

(ドアを開ける音がした。太郎が帰ってきたのだ。)

(6) 어제 영화관에 갔는데 타로가 있는 거야.

ecey yenghwakwan-ey kassnuntey thalo-ka issnun keya.

昨日 映画館-に 行ったが 太郎-が いる(現在) kes-ita

(昨日、映画館へ行ったんだけど、太郎がいるのよ。)

(2) と (3) は、従来の研究で kes-ita I と分類されている名詞文の用例であり、(4) と (5) は、従来の研究で統語的に名詞文ではないとみなされている kes-ita II の用例である。

(6) は、従来の研究では分析対象ではなかったもので、ここでは、便宜上、kes-itaⅢと呼ぶことにした。(2)～(6)の kes-ita 文に対する名詞性の度合いの結果は【表 3-1】のとおりであった。

【表 3-1】 kes-ita 文の名詞性の度合いテスト

テスト項目	kes-ita I 例(2)	kes-ita I 例(3)	kes-ita II 例(4)(5)	kes-ita III 例(6)
① kes の代用	○	×	×	×
② 「-(u)m」名詞化辞への置き換え	×	○	○	×
③ 「-kes-i anita (～のではない)」否定	○	○	○	×
④ 「ita」抜き	○	○	○	×
⑤ 分裂文の成立	○	○	×	×

【表 3-1】で分かるように、従来の研究において名詞文ではないとみなされてきた kes-ita II は、名詞文である kes-ita I に類似した特徴が多く見られた。そのため、本論文では、従来の研究で kes-ita I と kes-ita II という 2 つに分けられていた kes-ita 文を名詞性の度合いによって【表 3-2】のように 3 つに再分類した。

【表 3-2】本論文での kes-ita 文の 3 分類

kes-ita 文の分類	同一文内の形	名詞性	先行研究での名称
① 名詞文 統語的に名詞文である	X は Y だ	高	kes-ita I
② 疑似名詞文 統語的に名詞文とは言い難いが、名詞文に類似した特徴をもっている	Y だ	高	kes-ita II
③ 非名詞文 統語的に名詞文でもなく、名詞文に類似した特徴をもっていない	Y だ	低	分析対象外

そして、「名詞文」「疑似名詞文」「非名詞文」としての kes-ita 文を「主題－解説」構造の観点で考察するために、文レベルにおける「主題－解説」構造の定義を次の(41)のように定義し直し、kes-ita の基本的な機能の仮説を次の(45)のように立てた。

(41) 本論文における kes-ita 文の「主題－解説」構造の定義

情報構造の観点から見て「YがXについて何かを述べる」という解釈が可能であれば、Xは「主題」であり、Yは「解説」である。そのとき、XとYは、「主題－解説」構造をなしている。

#### (45) kes-ita の基本的機能（仮説）

kes-ita の基本的な機能は、当該の文が「主題－解説」構造の中で、「主題についての解説であることを示す」ことである。そのため、聞き手は同一文内に主題が明示的に現れていない場合は、文を超えたところの先行文脈や発話状況などから主題を探し、kes-ita 文の意味を、「主題について何かを述べている」と解釈する。

## 第4章 名詞文としての kes-ita 文

4章では、最も典型的な kes-ita 文である「名詞文としての kes-ita 文」を「主題－解説」構造の観点から考察した。名詞文としての kes-ita 文は、kes が名詞として働き、名詞文をなすもので、kes の性質によって、「kes が具体的なものを指し示す場合」「kes が抽象的なものを指し示す場合」「kes が名詞化辞として働く場合」という3つに分けることができた。そして、名詞文としての kes-ita 文は、kes の性質の違いは関係なく、いずれも「主題－解説」構造をもっており、主題についてそれは何であるか、どのようなものであるかなどを述べていた。名詞文としての kes-ita 文の場合、主題は、同一文内に明示的に現れる場合（構文明示的である場合）と、同一文内には明示的に現れていない場合（構文非明示的である場合）があった。が、構文非明示的である場合は、先行文脈や発話状況から主題を探し出すようになる。そして、主題を探し出すことができたなら、当該の文は、それについて何かを述べていると解釈できた。

【表 4-1】名詞文としての kes-ita 文の分類と特徴

	①kes が具体的なものを指し示す場合	②kes が抽象的なものを指し示す場合	③kes が名詞化辞として働く場合
kes の指示対象	具体的	抽象的	なし
主題の指示性	指示的	非指示的	非指示的
主題 (X) について述べる内容	X は、何であるか	X は、どのようなものであるか (属性)	X についての詳細・X と同等な意味をもつもう一つの事態

## 第5章 疑似名詞文としての kes-ita 文

5章では、「疑似名詞文としての kes-ita 文」について考察した。疑似名詞文としての kes-ita 文は、統語的には名詞文であると言い難いが、名詞文に類似した特徴が多く見られるもので、主題について述べる内容によって、「言い換え」「結果」「理由」「主観的解釈」を述べるものという4つに分けることができた。そのうち、理由を述べる kes-ita 文は、当該の理由が話し手の領域に属する情報であるため、理由を求められたとき、話し手が既に知っている理由を新情報として聞き手に提示し述べる場合と、当該の理由が話し手の領域に属する情報でないため、ある事態について推論を行い、導き出された理由を述べる場合という2つに分かれ、前者は、理由の表現が明示的に用いられ「理由節+結果節」という複文全体に kes-ita がつくのに対し、後者は、理由を表す部分に kes-ita が直接つくという構文的特徴が異なっていた。これは、理由を聞かれ、その返事として、話し手が既に知っている理由を提示するだけの場合、韓国語には理由の表現を明示的に用いなければならないという制約があるためであると思われる。

疑似名詞文としての kes-ita 文を、主題の特徴から見ると、主題となる事態が先行文脈に現れ、非指示的ある「言い換え」「結果」「理由（話者域外情報）」を述べる kes-ita 文と、主題が人の行動など、発話時の状況として現れ、指示的である「理由（話者域内情報）」「主観的解釈」を述べる kes-ita 文とに分けることもできた。そして、前者は、地の文に多く現れるのに対し、後者は、会話文に多く現れるという違いもあった。また、主題となる事態について「言い換え」「結果」「理由（話者域外情報）」を述べる kes-ita 文には、「P=Q」といった類似関係や「P→Q」といった因果関係が成立していた。が、それは、kes-ita の機能ではなく、kes-ita の使用により先行文脈や発話状況から主題を探した結果、人間の文章理解過程における推論によって、主題となる事態と kes-ita で表される事態の間にそのような関係があるものとして理解されるためであった。

【表 5-2】疑似名詞文としての kes-ita 文の分類と特徴

主題について述べる内容	主題の所在	主題の指示性	主題との関係	用例の偏在	kes-ita の必須性	
①言い換え	先行文脈	非指示的	P=Q	地の文	低	
②結果	先行文脈	非指示的	P→Q	地の文	低	
③理由	話者域外情報	先行文脈	非指示的	P→Q	地の文	低
	話者域内情報	状況	指示的	—	会話文	中
④主観的解釈	状況	指示的	—	会話文	高	

## 第6章 非名詞文としての kes-ita 文

6章では、従来の研究では殆ど分析対象ではなかった、統語的に名詞文でもなければ、疑似名詞文と異なり、名詞文に類似した特徴も見られない非名詞文としての kes-ita 文を「主題—解説」構造から考察した。

非名詞文としての kes-ita 文は、本来、「主題についての解説であることを示す」という kes-ita の機能により、前の文脈や状況から主題を探そうとするが、そこには主題に該当するものを探し出すことができないため、当該の kes-ita 文の意味解釈に必要なもう一つの情報は後ろにあると考え、後ろを検索するようになる。このように後ろを検索するために、その次の発話を待つという意味解釈過程が繰り返されることによって語用論的に強化され、その意味が、「後続発話への関連を示唆する」とものと解釈されるようになったと考える。

非名詞文としての kes-ita 文は、一見、名詞文や疑似名詞文としての kes-ita 文とは意味的に異質なものに見えるが、非名詞文としての kes-ita 文の「後続発話への関連を示唆する」という意味解釈と、名詞文や疑似名詞文としての kes-ita 文の「主題について何かを述べる」という意味解釈は、いずれも kes-ita 文の意味解釈には kes-ita で表される部分以外に、もう一つの情報が必要であり、2つの部分に関連していることで共通しており、その点で、両者の kes-ita の機能は本質的に同じではないかと思われる。

## 第7章 二次的な意味が現れる kes-ita 文

7章では、名詞文や疑似名詞文としての kes-ita 文のうち、主題について何かを述べるという基本的な意味以外に、聞き手の置かれた状況によって二次的に派生した別の意味が現れる kes-ita 文について考察した。二次的な意味が現れる kes-ita 文は、「当為判断」「忠告・命令」という2つの用法として用いられていた。

「当為判断」を表す kes-ita 文は、主題について本質や傾向を述べることによって、文全体で「当然、そうである」「当然、そうすべき」という当為判断が表わされ、話し手が望ましいと考えている行為の実行を聞き手に促しており、「忠告・命令」を表す kes-ita 文は、忠告や命令をする場でよく用いられ、話し手が望ましいと考えている行為の実行を聞き手が実現していないという状況で、その行為の実行を指示や命令のように聞き手に強要していた。

そして、2つの用法は、別々に存在するのではなく、話し手が聞き手に促している行為が、社会一般的規範性が高いものからより個別的なものへ、行為の実行の強要性が低いものから高いものへといった連続的であった。

【表 7-1】「当為判断」と「忠告・命令」を表す kes-ita 文の違い

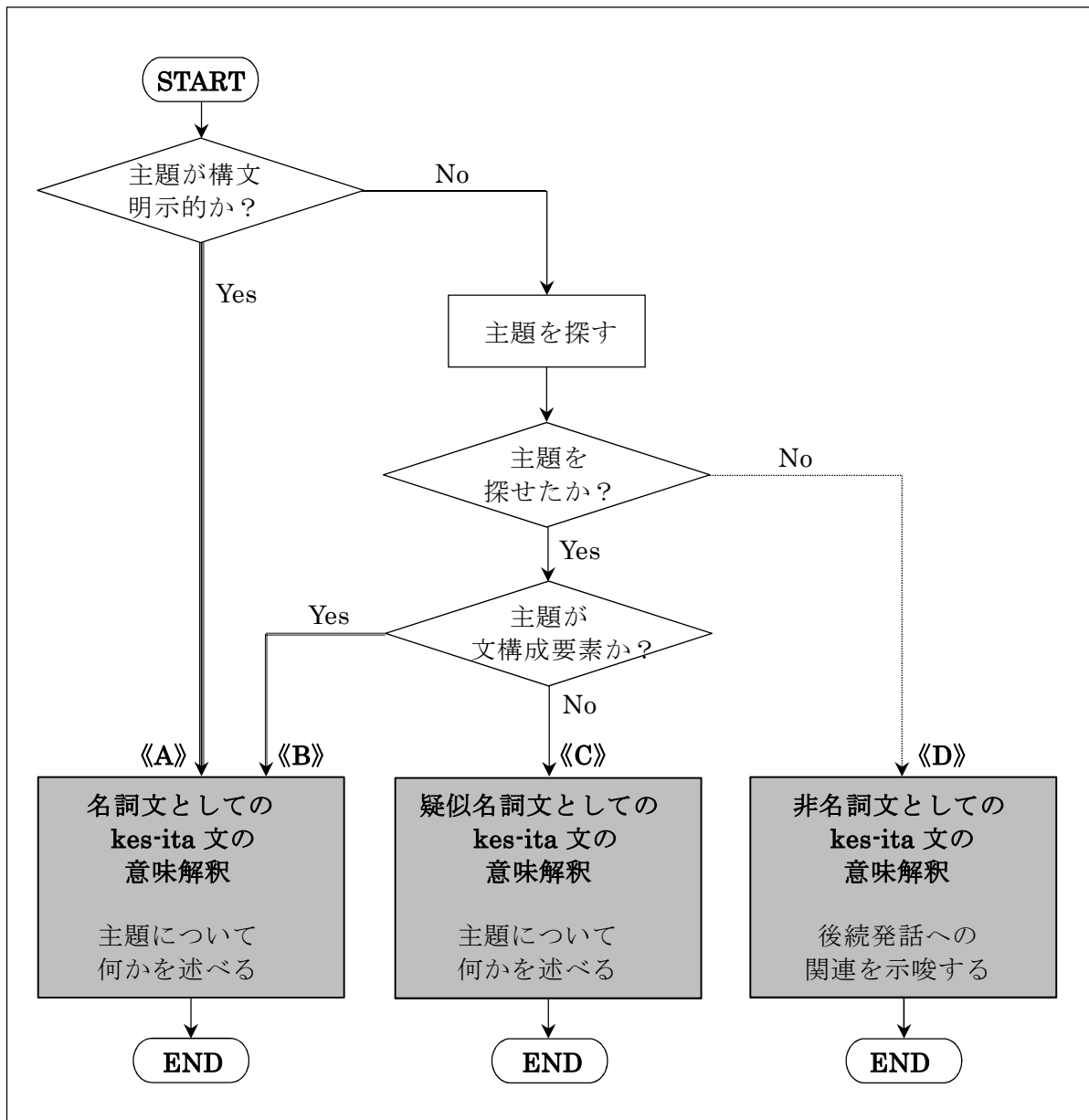
二次の意味	kes-ita 文の種類	主題の所在	社会一般的規範性	行為の実行の強要性
①当為判断	名詞文	同一文内	高 ↑↓ 低	低 ↑↓ 高
②忠告・命令	疑似名詞文	先行文脈・発話状況		



## 第8章 kes-ita 文の意味解釈のプロセス

8章では、4～6章でそれぞれ示した kes-ita 文の意味解釈のプロセスをまとめて提示し（【図 8-1】）、それに基づき、kes-ita の基本的な機能の修正案を（1）のように提案した。

【図 8-1】 kes-ita 文の意味解釈のプロセス



### (1) kes-ita の基本的機能（修正案）

kes-ita の基本的な機能は、当該の文が「kes-ita 文の意味解釈には kes-ita で表される部分以外に、もう一つの情報が必要であると示すこと」である。それが、前の文脈や状況に存在する場合は、主題となり、当該の kes-ita 文は、「主題－解説」構造の中で、主題について何かを述べるものとして意味解釈さ

れる。一方、前の文脈や状況から探し出すことができない場合は、後ろを検索することになり、後続発話への関連を示唆するものとして意味解釈される。

## 第9章 kes-ita 文と日本語との比較

9章では、日本語の文末表現である「モノダ」「コトダ」「ノダ」の用法を基に kes-ita との対応関係を考察した。モノダ、コトダ、ノダと kes-ita が対応する場合は、kes-ita 文が「主題－解説」構造をもっており、主題が、話し手と聞き手がお互いに認識し共有している明確である場合、なおかつ、主題について何を述べているのかが明確である場合であった。それに対し、主題が話し手の中に内在しており、聞き手がそれを認識できない場合や、kes-ita 文が述べている対象が状況として現れ、それについて話し手の心的態度を表す場合のモノダ、コトダ、ノダの用法には kes-ita は対応していなかった。また、非名詞文としての kes-ita 文の場合は、疑似名詞文としての kes-ita 文と異なり、主題に関する制約がないため、ノダと対応しているが、話し手の心的態度が現れるノダとは対応していなかった。この点は、kes-ita には、当該の文が「kes-ita 文の意味解釈には kes-ita で表される部分以外にもう一つの情報が必要であることを示す」という機能以外に、話し手の心的態度を表すというモダリティ表現としての働きはないということを示唆している。

## 第10章 結論

10章では、序論で立てた3つの目的についての本論文の成果を確認し、今後の課題について述べた。本論文では、従来の研究で kes-ita I（統語的に名詞文）と kes-ita II（統語的に非名詞文）という2つに分けた kes-ita 文を、名詞性のテストを設け、「名詞文」「疑似名詞文」「非名詞文」という3つに再分類できた。疑似名詞文としての kes-ita 文は「主題－解説」構造から考察した意味レベルにおいても、主題について何かを述べると解釈されるという点で、名詞文としての kes-ita 文と密接に関連していた。また、「主題－解説」構造の観点から kes-ita 文を考察することにより、kes-ita 文の意味解釈のプロセスの全体像が提示できた。そして、kes-ita 文の意味解釈に「主題－解説」という概念を導入することにより、kes-ita の基本的な機能を「kes-ita 文の意味解釈には、kes-ita で表される部分以外に、もう一つの情報が必要であることを示す」ことであると提案したため、「名詞文」「疑似名詞文」「非名詞文」といった統語構造の異なる全ての kes-ita 文に対し、統一的な説明が可能となった。これにより、kes-ita 文の全体像を網羅的に捉えることができると考える。